



路地へ

中上健次

監督・構成＝青山真治

の残した

フィルム

旅・朗読＝井土紀州



奇蹟の生まれた場所へ 中条省平

『ユリイカ』の青山真治は、現代日本の風景の真実を発見した。繊細にゆれるそのモノクロの画面は、ここ十年ほどの日本映画のなかで、もっともリアルに、なにもない日本の風景の肌ざわりをとらえている。

一転して、青山真治は『路地へ』で、日本の風景の失われた起源を求めて、紀州に向かう。迷宮をゆく青山をアリアドネの糸のように導くのは、中上健次がしるした「路地」の物語である。

「路地」、それは紀州にある中上健次の生まれ故郷であるとともに、この世とあの世をつなぐ、もうひとつの場所だ。

中上健次の書く路地のなかで、高貴な穢れた血をもつ美しい若者たちは、濃密な性と暴力のオーゾーに身をなげけては、つぎつぎに滅びてゆく。中上の描く若者たちの物語は、本当の風景を失った現代の日本のなかであって、路地だけが可能にする残酷で美しい綺譚、ひとことでいえば、奇蹟だった。

奇蹟の生まれた場所をこの目で見ようと、その風景に向かって、青山真治は車を走らせる。車はトンネルをいくつも潜りぬける。まるで、その暗闇をぬければ、もうひとつの世界の奇蹟と出会えるかのように。だが、まもなく車はヒッチハイカーの指示で須野という町に漂着し、小学校の廃屋にたどりつく。「Sunno...the end of the Road」と、画面にタイトルが印される。

だが、道の終わった場所から、もうひとつの場所への道が始まる。中上健次の小説の朗読を背景に、カメラは、いまの日本の海や山や橋や木々や街並みを映しだす。ふと気がつくとき、観客は、中上健次自身が撮った「路地」の最後の風景のなかに滑りこんでいる。それは遠い幻覚の記憶のように、重く、なつかしく、衝撃的な瞬間だ。奇蹟の生まれた場所の真実とは何だったのか、観客は自分自身の眼で確かめることになるだろう。

(フランス文学)

映画は、ひとりの若い映画作家の失われた「路地」への旅を描き出す。彼は車で幾つも峠を越え、巨木の下で、一九八二年に四九歳で急逝した小説家、中上健次（「枯木灘」「地の果て 至上の時」）が生まれ、その小説の舞台とした路地がかつてあった場所、海で、中上の小説を紀州のイントネーションで読み、彷徨し、途方に暮れる。そして、ふと幻でも見るように「路地」を目にするのだ。そこには、細い道がある。草むらが風になびき、洗濯物が揺れている。駄菓子屋。壁の落書き。子供が日傘をくるくる回しながら走り、坂道の脇に布団が干され、人が歩き、自転車で行き交う...

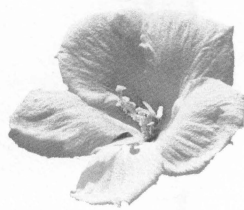
監督は「ユリイカ」「月の砂漠」が2年連続でカンヌ国際映画祭コンペティションにノミネートされる快挙を果たした青山真治。青山監督は、その風景を映画によって抱きしめ、坂本龍一と大友良英の音楽がそれに寄り添い、静かに優しく響く。音楽を作るように映画を作った監督は、中上健次に捧げる静かな悲しみを湛えた小さな音楽を奏でた。その音楽に、やはり「ユリイカ」「月の砂漠」の田村正毅（撮影）、菊池信之（録音）が参加している。

路地へ

中上健次

の残した

フィルム



2000年ロカルノ国際映画祭
2001年ロッテルダム国際映画祭
チオンジュ映画祭、
ベサロ映画祭 正式出品作品

監督・構成 青山真治
旅・朗読 井土紀州
撮影 田村正毅
録音 菊池信之
編集 山本亜子
プロデューサー 越川道夫・佐藤公美
朗読作品 「罌」 枯木灘 「千年の愉楽」
「地の果て 至上の時」
「日輪の翼」 「奇蹟」
音楽 [Plannet 2.5]
大友良英 Sachiko M +
キランター・ウォーラー
[Interrogations]

GROUNDED ZERO remixed by
KANDIAN・SACHIKO・MARTIN
[A Flower Is Not A Flower]
[Paraphrase] 坂本龍一
製作・配給 SLOW LEARNER +
BRANDISH
2000年/カラー/35mm
スタンダードサイズ/64分

これぞまさしく青山真治の“ユリイカ”なフィルム

8月4日（土）～17（金）待望のロードショー！！

時間 = 1:55/3:15/4:35/5:55/7:15 ※8/4（土）7:15の回休映

扇町ミュージアムスクエア ホワイティ梅田泉の広場M-10右上がる東へ5分
tel=06-6361-0088 HP=www.oms.gr.jp